
三本 啓輔 (みつもと けいすけ)



【書名】河童が覗いたインド

【著者】妹尾河童

【発行】新潮社（新潮文庫）

インドをあちこち旅したときに、部屋の俯瞰図とインド人の様子や建物のスケッチを記録したものです。普段、目にするものは見ただけで観察することは少ないと思います。常に観察することは疲れますが、注意深くよく見て観察することで気がつくことがあります。その一つのやり方が提示されていると思います。河童さんは実際にメジャーで測定して正確にスケッチしているようです。また、人の目線は水平ですが、部屋を天井の上から覗くように見ると視線が変化し、空間の使い方など新しい発見があるかもしれません。ヨーロッパ編とニッポン編も出版されています。

【書名】きれぎれ

【著者】町田康

【発行】文藝春秋（文春文庫）

頑張れば報われる、なんてことが言われますが、そんなにはうまくいかない。お金がなくて日々、素うどんを食べて過ごしたり、清酒を朝から飲んでいる社会に適応できないダメ男が一念発起して、やってみてうまくいきそうと思ったりもすることもたまにはあるのかもしれないけれども、やっぱり駄目だった。という物語がパンク歌手兼作家の町田康には多いのだけれど、やはりやってみないと分からない。一見するとだらだらした文章で理解できないように見えますが、リズム良く響く言葉遣いで面白く読めます。ここで紹介した「きれぎれ」は芥川賞を受賞したものですが、これに限らず他の著書には詩集もあったりして、合うリズムを探してみるのも良いかもしれません。ただし、アレな表現が多かったりするので注意も必要です。

【書名】鏡の中の物理学

【著者】朝永振一郎

【発行】講談社（講談社学術文庫）

口語的に物理の本質的な概念を語りかけてくれています。出てくるのは最近、ノーベル物理学賞でキーワードとなることが多い対称性であったり、素

粒子であったり、その内の一つである光子であったりと、なかなか説明することの難しいものたちなのですが、あまり数式を使わず、、とは言っても最後の方で少しだけ出てきますが、、優しく説明しようと試みています。一読して理解することは難しいかもしれませんが、読んでみる価値はあると思います。また「科学に対する第三の意味づけ」では、よく問われることの多い「科学は生活に役に立つのか」という問いにも答えています。

【書名】 ゼロからトースターを作ってみた結果

【著者】 トーマス・トウエイツ (村井理子 訳)

【発行】 新潮社 (新潮文庫)

物事を考え抜いてやり通すことはかなり大変ですが、それをする事で得るものがあると思います。これはトースターを解体して、原料を調べ入手し、自分なりに部品を作ってみて、トースターに組み上げる物語です。部品としては筐体、導線、発熱体などが思いつきますが、実際に解体してみると多数の部品からできていることが分かります。それらの原料を得るために、土から掘り出された状態のものを入手するというルールを決めると、どこに行っても誰に頼れば良いのか考えないといけません。そして妥協しながら部品を作りようやく組み立てるのですが、見た目は非常に悪く、コンセントに繋ぐことはもちろんためられるものです。廉価な市販品を参考にしたのに、膨大な費用と苦労が伴ってしまっています。もちろん時間も。著者はトースターの原理だけでなく、それに関連する経済など様々なことも学んでいるのですが、面白そうだからやってみてそうなのが、科学の本質に繋がっていると感じます。

【書名】 不道德教育講座

【著者】 三島由紀夫

【発行】 角川書店 (角川文庫)

言われたことを鵜呑みにせず自分の言葉で理解することの重要性が近年、言われています。本書では「これをしましょう」、「これをしましょう」ではなく、あれこれ言う大人の行動から不道德な場面から反面教師的に学ぼうというものです。しかし、読んでいるうちに道徳的と思われる行動も不道德的と思われる行動もどちらも正しそうに思えパラドックスに陥るユーモアがあります。1講座あたり5ページくらいの分量で70講座くらいあるので、少しずつ軽く読むのが良いのではないのでしょうか。最後に物理学者は職業上疑い深い人が多いと思われます。